

第三百二十一回 青葉会

平成二十四年十二月五日(水) 鈴木演芸場(昼の部) 見物(十二時半〜十六時半)

↓九段下・琥珀にて年忘れ句会(十七時半〜二十二時)

〈選者〉 ☆川合万里子 先生

〈出席者〉 今井紀久男 小川恭延 小西弘子(句会のみ) 豊田ゆたか 中野一灯 中村淑子

(元・小歌糸女将・特別参加) 福島正明 山内天牛

《互選句》

ゴシックは撰者の天

五点 ☆師走寄席とどのつまりの声を聴く

紀久男 (万・弘・ゆ・灯・正)

四点 木枯しにさらはれ逝くや勘三郎

全 (弘・ゆ・淑・天)

☆極月の寄席にくつろぎ二三合

全 (万・恭・ゆ・正)

三点 ☆往来は師走選挙や寄席太鼓

ゆたか (万・紀・恭)

☆昼寄席の熱爛嘶床の冷え

全 (万・灯・淑)

着膨れて芸の深さを寄席に聞く

一灯 (ゆ・淑・天)

☆落語聞きみな晩節の忘年会

全 (万・恭・淑)

☆手話ふたり落葉のほふ木のベンチ

全 (万・弘・正)

二点 存(ながら)へて詩友と師走寄席に在り

万里子 (紀・恭)

星を売る三味線漫談冬初め

全 (弘・正)

次々と貧乏嘶や師走寄席

全 (弘・天)

暮れ早しとりの嘶は宝くじ

全 (灯・淑)

☆一朝のそろばん合せ年暮るる

恭延 (万・灯)

☆年の瀬の鈴木で搗つくく尻餅や

ゆたか (万・恭)

一点 気が狂ふほどの小春と嘶家が

万里子 (正)

鳴き声の冴える子猫の師走寄席

恭延 (天)

暮早し惜しみきれずや勘三郎

弘子 (紀)

ふぐちりやこの一年を浚ひたり

全 (紀)

三味の音も上野鈴木年忘れ

ゆたか (天)

☆踏み試す落葉の嵩やけもの径

一灯 (万)

☆紅葉の紅(へじ)もさびしきつれあいの死

淑子 (万)

参道にひざ折りて見る寒ぼたん

全 (灯)

楽しさにさそわれ嬉し暮の酒

全 (ゆ)

物真似の上野鈴木小鳥来る

正明 (紀)

冬の火事神久蔵にくじ残す

天牛 (紀)

●次回青葉会

正月五日(土) 初芝居総見：新橋演舞場(昼の部)

一月二十四日(木) 初句会：午后六時〜九時 談話室

以上 文責 紀久男

平成二十四年師走句会報

一 雲ひとつない冬晴れの一日。当会恒例の寄席見物。志ん馬内儀の恵美めぐみさんから四つの寄席の番組を取り寄せ、久しぶり鈴木にして大当りでした。今年小三治から眞打に抜擢された一之輔や彼の師匠の一朝、若者に人気の喬太郎、喜多八と腕達者の嘶家が揃った上に色物：漫才、三味線漫談、ジャグリング、奇術、物真似が粒揃い。就中、代演の子猫こねこ（猫八の倅）が鈴虫やオットセイ等の鳴き真似が上手く、しかも研究熱心で舞台ずれしていない態度が受けていました。平日の昼ですが客の入りは仲入り頃からほぼ満席。トリの小里んは先代小さん仕込みの渋い芸だが途中で席を立つ若者が数人居たのは残念。一寸失礼かと思えます。

今回は九月にご主人を亡くされた元・小歌系こかいとの女将（青山で小唄の師匠もされた）を気晴しにお誘いし、鈴木で先生らに紹介した所、ついでに句会にもどうぞと言うことに相成った次第です。

二 忘年句会はドタキャンで三人減って九名。店を貸切りの数年前の賑やかだった忘年会の再現ならず、一寸おとなしい句会となりました。すぐ近所に仕事場のある弘子さんは定刻に出席。琥珀御主人の特別料理（メニューに無いあつさりとした中華）と新潟の銘酒（「久保田」千寿、「張鶴」等）を賞味しつつ弘子さんの捌きで開会。披講に続く合評から恒例の二次会となりました。店にはほかのお客が居る為声抑えてのクリスマスソングや都々逸等で氣勢上がりませんでした。最後に先生へ御礼と今年活躍された一灯さんへ落語協会のカレンダー、「俳壇」にデビューされた弘子さんへ来春新開場の歌舞伎座カレンダーを贈呈。「萬緑」九十一月所載の弘子さん、忠彦さんの作品合評のコピーをお配りしました。

三 関係者近詠

時雨去り又時雨来る東山 允章 出雲街道大渋滞や神の旅 昇
あはあはと冬虹かかる東山 全 冬ざれや古代のマヤの予言めく 全
薄日差す水面にひそと浮寝鳥 全 さり気なく見舞いし夜の別れ霜 盛雄
櫛の歯の欠けたるごとく冬の月 三恵 威光もて汚染溶かせよ初日の出 健介
（訃報が続いていることもありまして） 追悼 塩見勝さん
年の瀬に今日も届くや新暦 全 黄落や古代ロマンを語り逝く 紀久男
素面とて声色とちる年忘れ 紀久男 散り紅葉もう聴けぬなり塩見節 全

四 勘三郎の急死・・弘子さんの句にあるように57歳は早過ぎ惜しいです。

三津五郎と同じ年頃で一番仲良し。平成六年十二月、勘九郎時代の最後の舞台はねての打揚で三津五郎が「勘九郎の勘三郎襲名とかけて忠臣蔵と解く。そのころは六（禄）を失い、名を残す」とやり大いによるこばれた由。勘九郎時代、テレビで『今宵は勘九郎』を主演し番組の最後に自分の句を披露していました。一句だけ挙げてみます。

「母が亡くなつた日」の前書きで
父母ともに野辺の送りや花小袖（平成四年四月）

十二月十四日

紀久男記